

ESSAY

私とギター

久吉 隆郎

日本医科大学第二病院外科



コンサートにて

私は本業は外科医だが、実はもう一つの顔がある。それはギターを弾くことである。あまり自慢はしていないが、心ひそかに自分の人生のかなりの部分はこの楽器に負うところが多いと思っている。仕事上は爪を切らなくてはならないから、人前で弾くにはハンデイがあるが、人に知られぬようにスケジュールを調整してはこっそりと爪を延ばして演奏に間に合うようにしている。

さて、よく聞かれることだが「いつごろからギターをはじめたのか」との問いには、10歳ごろと答えることにしている。自分でもは

っきりとした記憶がないのだ。自分史を振り返ってみると、昭和34年ごろ私たち一家は九州から上京したが、その時すでに一台のギターが家財道具としてあった。カラーチェという戦前によく輸入された楽器で、現在のギターより一回り小さくつくられ、子供が弾くのに適し、当時の楽器のなかでは精密につくられ音程がしっかりしていた。

父は朝鮮の京城生まれであった。第二次大戦前の満州や朝鮮にはいろいろな民族と諸外国の音楽が豊富に交流しており、そのなかでギターやマンドリンは広く大衆に愛好されて

いた。同じく京城にいた古賀政男氏はのちに歌謡界で大成功を果たすが、そのメロディに朝鮮風の旋律が取り入れられていたことはよく知られている。

終戦後父は進駐軍に通訳として勤務したが、学徒出陣のさいにフィリピンで罹患したマラリアが再発し首になってしまった。しかし、その時に軍から高性能の小型ラジオを入手し、私も小さい時から1日中このラジオから流れてくる音楽をきいて育った。そんな環境にあつて子供の時から父のギターを聴いていたわけだが、不思議なことに一度もギターを教えてもらったことがない。むしろ私はピアノを習いたかったのだが、当時ピアノはきわめて高価で学校にも1台くらいしかなく生徒に触らせてもらえなかった。

小学校5年生ころ、音楽の先生よりも上手にピアノを弾くと評判の同級生がおり、ある日彼が私の家に遊びに来た。すると、彼はかたわらに置いてあつたギターを弾いた。たしか「禁じられた遊び」のさわりの部分でなかつたらうか。その後久しく忘れていたが、数年前にこの友人がドイツに在住しオペラ指揮者をしていると知り、突然わが家に来たことを思い出した。あの後夢中になつてあの曲を弾こうとして3日目になんとかできるようになつたのだつた。もちろん楽譜は読めなかつたから記憶と音を便りに弾いたのであろう。

それからしばらくして昭和39ごろNHK教育テレビでギター教室がはじまり、自分だけでなく全国的にギター熱が高まつた。一方ではグループサウンズを中心としたエレキブームがこれをしのぐ勢いで広まつていったが、私はとうとう今日に至るまでエレキギターを手にするのではなく、パッサを中心としたクラシックギターの世界にしだいにのめり込んでいった。

高校に入学したさい、お祝いに河野賢氏製作の手工ギターを買ってもらつた。そのころは国産ギターは質が劣るといわれていたが、河野氏は国際ギター製作コンクールで優勝した。当時でもかなり高価であり、わが家の経済状態ではかなりの出費であつたと今にして思うのだが、その時はただただ嬉しさのあまり興奮するばかりであつた。このギターは今でも大切にしておりときどき弾いている。

15歳の時1年間ギター教室に通つたがこれは基礎を確立するうえで大変役にたつた。十代の数年間は1日中ギターを弾きつ放しのまさにギター三昧の日々であつた。また巨匠アンドレス=セゴヴィアのレコードは何度も聴き、難曲にぶつかるとかえつて情熱が湧き、弾けるまで練習しつづけたものである。

これほどギターばかり弾いているのをよく両親も放つておいたもので、何かに夢中になると飽きずにつづけられる私のこの性格は、両親の放任によるところが大きい。母はよく近所の人から「お宅のおさんはピアノがお上手ですね」といわれたそうである。私のギターのテクニックはすでにあるレベルに達しており、家の外ではピアノの音と区別がつかなかつたのだ。

私が上達するにつれていつの間にか父はギターを弾かなくなつてしまつた。父がいつも弾いていた曲のなかに「東洋風奇想曲」というのがあつた。いつの間にか私も弾けるようになったのだが、長いこと楽譜を探しても見つからなかつた。8年ほど前に函館でギター協会の方にこの曲を聴いてもらい後で出版社を教えていただき、実に40年目にして楽譜を入手できたが、全く耳で覚えていたとおりで大変驚いた。音楽の伝承はこのようになされるのだろう。

大学受験のころになり、勉強を選ぶか、音

楽を選ぶか真剣に悩むようになった。17歳の夏休みに私たちは火災にあい、ギター1本を残して一切の家財道具を失った。しかしこの出来事がその後の人生を大きく変えることになり、医学部に進学することになった。

大学に入るとジャズとの出会いがギター演奏に幅をもたせるようになった。片っ端からレコードを買い漁り、いろいろなジャズに関する書物を読んだ。いよいよ医師になってから、それまでためておいた奨学金で長年の夢であったピアノを買った。仕事柄とても習う時間がないので自分でピアノの楽譜をみて指定された指使いで音を出す、といった時間のかかる方法で独学していった。しかも週30分くらいしか練習時間がとれなかったのだが、そのうちに看護学校の講堂にあるピアノを1時間ほど昼休みに弾かせてもらうようになり、これがかなり上達に役だった。

最近では自宅に電気ピアノを購入したので深夜でもヘッドフォンで練習することができる。残念ながらピアノに関してはとても人前で弾いて聴かせるまでの域には達していないが、ピアノを練習したおかげで音楽のしくみや作曲方法が理解できるようになった。特にギターの楽譜は他の楽器と異なった記載方法がとられており、ピアノ楽譜になれていなかったのだが、いまではピアノ譜をみて即ギターで弾くことができる。これまでにバッハ、チャイコフスキーなどの曲を自分流にギター編曲しているが、将来はギター曲集を出版するのが夢である。

私のギター音楽の目標のひとつに即興演奏があり、楽譜なしでその場の雰囲気にあわせて心のおもむくままに音を奏でるのであるが、言うは易く行うのは至難の業である。しかし最初はまね事ながら適当にでたらめを弾いて行くうちにしだいに方向性ができてゆき、6

年ほどしてようやく自分なりの演奏スタイルが見えてきた。むろんまだまだ未完成であるが、これまで自分の体験してきた音楽と音楽以外の諸要素のすべてが反映するのだから自分自身の個性を磨くことが必要である。音楽に限らず医学の分野でも自分だけにできる仕事を発見し、またつくりあげてゆくことが大切である。

長々と自分とギターについて書いてきたが、実はこれらは医学に通じる点がいくつかある。

技能の習得には、①個人の資質、②持続的情熱、③教育体系、④環境設備などの条件が必要であるが、これには重要な時間的側面が二つあり、一つは学習の開始時期で、年齢的に早ければ早いほど高レベルの技能を習得できる可能性がある。しかも習得された能力はその後の技能取得に影響するのである。たとえば楽器の習得は語学に似ており、日本人がどんなに英語を勉強しても日本語と同じように英語で考えることは困難である。

私の場合、いくらピアノを練習して曲が弾けるようになってもどうしてもギターで弾く能力には及ばないのだ。楽器は若ければ若いほど上達が早いし、語学は歳をとればとるだけ習得には労力を要する。この点、外科は手先の仕事だから若いうちに訓練するほどよい結果が得られるだろう。しかし、年々医学の内容が質量ともに増加するに従い外科医の成熟期間は長くなっているのではないだろうか。外科は手先だけのものでもないが、この方面に関するトレーニング法は今後研究されるべき価値があるだろう。

もう一つの時間的側面は、教育技法の進歩は技能習得に要する時間を短縮しうることである。すなわち学問の進歩は個人の学習期間を極端に短縮させる可能性があるのだ。よい

意味での王道は常に存在し、無用の労力は避けるべきである。それほど現代は情報が氾濫し、いかにして不必要な努力をしないで済むかが成功の秘訣でもある。1例をあげると、バッハの無伴奏ヴァイオリンのための独奏曲にシャコンヌという名曲があり、ギターでもかなりの難曲で40年ほど前なら日本人で弾ける人は何人もいないといわれていたが、今では十代の人たちが楽々と弾いている。これは楽器の演奏テクニックの進歩に加え教育システムの発達によるところが大きい。

歴史的に100年かかった道程も次の時代には数年の教育で達成してしまうのである。この現象は現代ではコンピューターを含めてさまざまなメディアの発達によりさらに加速されている。

医学においても同様で、かつて先人が心臓や肝の手術で味わった苦労は今日の若い医師たちには理解できない部分が多いであろう。このように音楽の道も医学の道ともに学ぶうえでは共通性があり、私の場合は一方の上達が他方の進歩を促したように思う。ギターを友にして人生の挫折や困難に直面しても乗り切る手助けになった。それどころか辛い時や苦しい時にどれほど音楽が心の支えになり救われたことだろう。

子供のころ私は体が人一倍小さく運動能力も劣っており、今でいういじめを受け、家庭の経済的状況もあり死んでしまいたいほどの苦しみを味わっていた。しかし今にして思え

ばギターを手にするようになってからしだいに自分自身に自信をもつようになり、運命が変わっていった。それは火災で消失してしまったが1台の楽器からはじまったのだ。常々、私は学生に「一生の間に何かひとつ楽器を手にすること」をすすめている。決して難しいことではない。簡単な楽器はいくらでもある。技術的には簡単そうでも奥の深い楽器もある。何もプロの演奏家を目指す必要がなければ、いくらでも自分にあった目標を設定することができ、いつでもどこでも何歳からでも楽器をはじめるとは可能なのだ。日本人のカラオケマシーンは世界中に広まったが、これは誰でも音楽に参加できることの証明に他ならない。かつて歌手はきわめて特殊な才能をもった人々のみがなりうるものだと思われていたが、カラオケの出現によって、誰でも訓練によりある程度歌手に近づけることがわかった。こうなると次に起こるべき現象とは何か。それは楽器による音楽への参加である。ここ数年、楽器店の楽譜コーナーに異変が起こっている。「中高齢のバイエル」とか「大人からのバイオリン」のような楽譜が次々と並び、しかも売れているのである。誰もがいつでも楽器をはじめられることに多くの人が気づきだした。そして自分の楽器と出会い、音楽に参加することでその人の人生は心豊かになってゆくだろう。音楽とは自分も他人も一緒に音を楽しむことだ。これは医療では得られない「心の癒し」なのである。